

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財)第五福竜丸平和協会
〒136 東京都江東区 夢の島3-2
都立第五福竜丸展示館内
電話 03-3521-8494



撮影・豊間根 功智 海底に横たわる第五福竜丸のエンジン (1995.12 三重県南牟婁郡御浜町の七里御浜沖)

生きる証の動力

武政 博

おれは いま
ふるさとの古座に近い
七里御浜の海底で
ビキニの水爆実験を抱えたまま
無言の四十年に生きている
あの日、一九五四年三月一日
おれを心臓とする第五福竜丸は
死の光 死の灰 死の雨を浴びた
それがおれたちの終りのない
被ばくのはじまりだった

おれを「物」と定めてくれるな
おれは海底に横たわりながらも
生きる証の動力なのだ
おれは今一枚の写真のなかで
数奇な運命をたどった事を話そう
そして母なる船体とも離れて
漁礁と化してはいるが
決しておれは朽ち果てたりはしない
平和のピストンを動かさねばならないから

船員 土佐市在住 詩集にビキニ被爆詩集「海水の
ない造船所」「骨にもなれない骨」など四冊がある。

船を凝視し、わが手で描く

厳寒の一月。海を渡ってくる冷たい風の中、多くの学校が訪れ、ここえそな館内に立つ船の訴え

平和の誓い——滋賀県長浜市北中学校二年生

私たち北中学校二年生は、一年生の時から、人権学習や憲法学習、そして平和についての学習をすすめてきました。平和学習のなかでも、衝撃的だったのは、原水爆についてです。広島・長崎で何十万という人々が命を失い、今もお放射能の影響で苦しんでいる人々があると知った時は、怒りを覚えました。そして、今回の修学旅行の取り組みのなかで、広島に落とされた原爆の一千倍の威力をもつ水爆の実験が南太平洋のビキニ環礁で行われ、その近くで死の灰を浴び、日本で第三番目の被爆者となった第五福竜丸の乗組員の方々のことを学習し、大きな驚きを隠し切れませんでした。また、日本人以外にも原水爆の実験によって放射能の影響を受け現在でも苦しんでいる外国人の人々がいるという事実も知りました。

そして、夢の島のゴミの中にすてられ、歴史の中から忘れ去られようとしていた第五福竜丸とその悲劇を再び世の中の人々に問いかけ、永久に保存し語り続けていこうと努力してきました。

私たちが、戦争を知らない世代として育ってきたので、平和とは水や空気のようなもので、その存在のあたりがたさや大切さをあまり感じることがありませんでした。あらためて、世の中を見渡してみると、一見、平和そうに見えますが、この平和は真の平和ではないのだと思える事実が多いことに気が付きます。なぜなら、今、この時にも、世界のどこかで戦争や、紛争があり、多くの人々が殺し合い、大勢の難民や飢えや病気に苦しむ子どもたちが増え続けているのです。

軍事力を持つ国も多く、核兵器も人類を何十回も絶滅させるほどの量が存在しています。また、チェルノブイリに代表されるように、原子力の平和利用である発電所の事故が私たちの住む日本でもひんぱんに起こっていて、放射能汚染は決して核兵器の使用によるものだけではないというところも知っています。さらに、今、話題になっている沖縄の米軍基地問題では、騒音や事故、そして、犯罪

も——。

一月二十六日、六人の班毎に来館した東京立川市の立川第七中学校二年生二〇〇余名は、見学後、館内いっばいにひろがって、思いに苦しむ人々があります。私たちにとても他人事とは思えません。

このように、憲法の中に掲げられている「平和主義」が脅かされている状況が多く見られます。

戦争は、人間が作り出す災害です。これからの21世紀に生きていく私たちは、「人類の願いは平和である。」ことを知っています。私たちは、広島・長崎、そして第五福竜丸の悲劇を繰り返してはならないという気持ちを強く持って、平和を心から願い、社会の動きにも敏感に気を配りながら、平和を守り発展させていくために、自分たちで出来ることを考え、少しずつ実行に移していきたいと思っています。

今日は、これから、この展示館で、第五福竜丸の生の資料をしっかりと見学して、今まで学習してきたことと合わせて、平和への誓いをより強く新しいものにしていきたいと思

二月、修学旅行で来館した同校二二〇名が船の前にならんで行った「平和セレモニー」の「誓いのことば」

父と暮せば

作/井上ひさし
演出/山口 晃
美術/藤原 龍
1996年 3月9日 PM7:00
10日 PM2:00
料金……1500円(中高生1000円)
東京芸術座アトリエ
問い合わせ…東京芸術座 練馬区下石神井4-19-11
☎03-3997-4341

思いの場所から第五福竜丸を「写生」。船首、船尾、階段にどかと座り、床に腹ばいになりと、さまざまな角度から、A4版の画用紙に鉛筆で三〇分余をかけてスケッチしました。

「事実を深く見詰め、考え、自分の物にする。それには自からの手で描くことが肝要」とは引率の先生。「船の悲痛が聞こえそう」という女生徒、「大きすぎるよ」とかたわらの模型や絵はがきを「参考にする」生徒もあって、日頃のカメラやビデオ撮影と状況が違って船も戸惑い気味ながら、しっかりと見つめられて満足気でした。

立ち上がる科学者たち

——組織化、自発的調査、批判と警告——

小川 岩 雄

ドイツの原爆使用を抑止する目的で米英の科学者が完成した原爆は、彼らの意図に反して日本に投下され、広島・長崎の悲劇を招いた上に、戦後米ソの激しい軍備競争まで引き起こしてしまった。彼らは自らの社会的責任の重さに目覚めるとともに、分断された個々の科学者の無力さや限界を痛切に思い知らされたのである。

その痛恨と反省から、彼らは戦後いち早く職域や地域、さらには全国的規模での連絡と協力のための組織化を進め、戦争終結後僅か二ヶ月の一九四五年十月にはワシントンで「原子科学者連盟」(FAS)を結成、翌年一月にはより広範な「米科学者連盟」(略称はやはりFAS)に拡大した。

FASは核軍縮の推進と核戦争の阻止をはじめ、科学技術の急激な発展に伴う大規模な災害や深刻な環境破壊のリスクの警告、国の

科学技術政策の批判と提言、市民や指導者向けの情報の提供など、さまざまな活動を現在も精力的に進めている。

例えば昨年七月に広島で開かれた第四十五回バグウオッシュ会議では、戦時中ロシアアラモス国立研究所で「マンハッタン計画」を指導した物理学者の長老の一人ハンズ・ベーター博士が、FASを通じて全世界の科学者に対し、核兵器や化学兵器、生物学兵器などの大量殺傷兵器の研究開発や、改良、生産から手を引くよう呼びかけていることが紹介され、多数の参加者が宣誓文に署名をした。

またFASの「生みの親」の一人であり、後にバグウオッシュ会議の創設と継続にも力を尽くしたラビノビッチ博士らシカゴのグループは、一九四五年、核問題などについての科学者の国際評論雑誌「原子科学者会報」(Bulletin of

the Atomic Scientists)を刊行し、専門家による情報の提供と批判的な言論の喚起に努めた。現在でもこの雑誌は貴重な役割を果たしており、とくに毎号表紙に描かれた「終末時計」の長針の位置で現在の情勢が核戦争にどの程度近いかを象徴的に示し、人々に警告を発し続けてきた。

科学者の組織化は他の国々でも進み、例えば英国では一九四六年に左翼的・自由主義的な国際組織「世界科学者連盟」(WFSW)が結成される一方で、やや政府寄りの国内組織「原子科学者協会」(ASA)も間まなく発足した。

一方、わが国の科学者には原爆を作った責任はないが、広島・長崎の災害調査や、被爆者の治療、身近な被爆者の体験談などを通じて、核兵器の残虐性や無差別性、非人道性などを余すところなく知り尽くし、強い衝撃を受けた。

しかし戦後の占領下では原爆についての報道や批判はGHQ(連合軍総司令部)が厳しく禁止したため、科学者や記者、被爆者などが調査結果や見聞、体験などを人々に伝えるのは容易でなかった。終戦から五年後の一九五〇年頃でさえ、漁村の青年会が主催する

科学者の講演会にまで警官が「立ち会い」、小さな部屋を借りて開く「原爆展」まで中止を命じられる。主に千葉県の学校や療養所、労組、PTAなどで原爆の話をしてきた筆者も「反米」と疑われ、県の「特審」につきまともわれる羽目になった。

このような状況を一変させたのがビキニ事件である。ブラボー・ショットとその後の大気圏内での激しい核実験競争は、放射性降下物(死の灰)を増加させ、地球規模の環境汚染を引き起こした。

各国、とりわけわが国の科学者は、各地で自発的に汚染の状況の測定や将来の予測、影響の推定などを行い、その結果は連日新聞に報道されて、国民の関心と認識を深めた。また大量の放射線を浴びた第五福竜丸の乗組員、とくに重症の久保山無線長の容体も担当医から刻々と伝えられ、国民は核兵器の脅威を改めて実感し、原水爆禁止の世論は空前の高揚を見た。

そしてこの事件は各国の科学者に今や核戦争は人類の自殺を意味することを教え、ラッセル・アインシュタイン宣言やバグウオッシュ会議の発足に導いた。(立教大学名誉教授、協会理事)

いまも悩み苦しんでいるビキニ被爆者、人間のことも忘れないでほしい

大石 又 七

一月十六日朝六時、TBSテレビがさしむけたハイヤーに乗って築地に向った。

四十二年前、日本中の台所を直撃してパニックにおとしいれた原爆マグロが、地下鉄十二号線入口工事で発掘されることになったからだ。そして、予定時間の十時近くになると、テレビカメラなど十数台が発掘場所に向けてならべられた。私には、埋められているマグロに特別な思いがあった。当時私は、捕獲したマグロを冷凍管理し、市場におろすという大事な仕事を受けて持っていた。掘り起こされる作業を見ながら、不安な気持ちで真っ白な灰が降る中、パラピソ紙や布で丁寧にくるんだマグロを魚倉に入れた当時の様子を思い出した。

ほんの一角だったので、結局その日は骨は見付らず十七・十八日の発掘予定も中止となった。そし

て五四三貫が埋められたという埋設場所の本格的な発掘は、築地再整備の十二年後と発表された。私は集まった大勢の取材陣に囲まれ、現況についての感想を求められた。マグロは出なくても、ここに埋められたことは厳然たる事実だし、場所的にも築地市場の正面入口。新大橋通りの歩道脇でもある。通行人にも市場にも、邪魔にならないような所にマグロ塚も作って、通る人たちだれの目にも触れるようなそんな、さり気ない平和のあかしが出来たらいいな、とかねてから思っていたことを話した。そして原爆マグロの教訓も記憶も大切だが、いまだに悩み苦しんでいる私たちがビキニ被爆者、人間のことも忘れないでほしいと言付け加えた。

昨年十一月十一日の毎日新聞(大阪版)はショックだった。一面トップ記事で「第五福竜丸・元

乗組員の生存者十五人中、十三人が、当時入院中の輸血が原因と見られるC型ウイルスに感染している、そして当事者たちはそのことを乗組員たちに伝えなかった。」というものだ。やはりと思った。死んでいった仲間もみな肝臓障害に悩まされていた。しかし、彼等の死はもう被爆とは関係ない、と片付けられた。それどころか生活態度が悪いからなどとかけ口まで叩かれ小さくなっていった。ただでさえ発病を恐れているのに、そのかけ口は数倍の重さで私たちにのしかかった。発病してもみな仲間にもひたかくしにした。私も被爆入院当時から続く肝機能障害を、近くの病院で検査した結果C型であることが分かった。やがてそれは癌に移行した。死の恐怖と共に九人目を意識していた。言葉に現せないあの病院での空しさ。八人の仲間もきつと同じ思いをしてきたことと思う。

悩んでいる私たちに大きな味方がいた。被爆入院当時、東大病院で主治医だった三好和夫・徳島大学名誉教授は、記事の中でこう言われた。「感染と被爆は一体のもの

であり、国の救済は必要」。この言葉は、私たち被爆者にとって何にも勝る有り難い言葉だ。不摂生でいい加減な者たちではないのだ、と言ってくれているように聞こえた。死んで行った者たちも、これで少しは浮かべられる。

一方、記事の中ではこんなことも書かれていた。「一部の放医研の関係者が『検査結果を知らせないのは、乗組員をモルモット扱いにしてきたと非難されても仕方がない』と告白」。なんとも複雑な気持ちだ。だれを信じていいのか分からない。私たち漁師は無知で弱い存在だった。その上、偏見と妬みにはさまれ、その目を気にしていまだに口を開けないでいる。ビキニ事件から四十二年。世界もまた少しも進歩しない。それどころか後退しているように私は思う。あの時、だれもが放射能の怖さを知ったはずなのに、核弾頭は五万発、核実験はいまだに続き、核の傘も是とされはじめた。危険を抱えたままの原子力発電もまた四九基とどまるところを知らない。今や地球上は、一触即発の危険のかたまりになりつつあるように思う。(第五福竜丸・元乗組員)

の日は骨は見付らず十七・十八日の発掘予定も中止となった。そし